

保護犬に新しい家族を

金沢市の民家の一室で、生後数週間の子犬5匹が元気にくしゃれ合っていた。ボランティア団体「石川ドッグレスキュー」(金沢市)の池田裕美子代表40が1匹ずつ抱き

かかえてミルクを与えると、安心したのか、互いに身を寄せ合っておりやすやすと眠りについていた。

子犬たちは生後間もなく、県内の各保健所から県南部小



子犬にミルクを与える池田代表(1月30日、金沢市で)

犬の保護活動に取り組む(左から)池田広子さん、光木照美さん、池田代表、出村真紀さん(地域情報誌BonNo提供)



動物管理指導センター(小松市)に集められ、その場で処分される予定だった。あちらが浮き出るほど弱っていたが、同団体に保護された元氣を取り戻した。

同団体は定期的に子犬を引き取り、ホームページやソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)などで引き取り手を探す活動を続けている。動物病院で検査や治療を受けた子犬は、約10人のスタッフ宅で愛情を込めて育てられる。引き取り希望者には居住環境や飼育歴を確認した上で、2週間ほどの「お試し

期間」を経て譲り渡す。

2002年に池田代表が1人で始めた活動は、新聞やテレビなどで紹介され、徐々に支援の輪が拡大。08年にはボランティアスタッフが100人近くになった。これまでに譲渡した犬は計約1900匹に上る。

8年間で約100匹を保護したという会員の宮武珠世さん(44)は、「人におびえていた犬も、粘り強く世話を続ければ心を開いてくれる。どんな犬でも変われる」と、命の大切さを訴える。

近年は、「心の支えがほしい」と犬を飼った高齢者世帯が、病気などで世話が難しくなり、引き取りを相談するケースが増えているという。池田代表は「人間の都合で犬が悲惨な目に遭うのはおかしい。10、15年後も自分で世話を続けられるかを考えてみてほしい」と呼び掛けている。

(川原陸)

殺処分1万匹下回る 昨年度、全国

環境省によると、2017年度に全国の保健所などで殺処分された犬は8362匹で、初めて1万匹を下回り、過去最少になった。08年度(8万2464匹)の約10分の1という大幅減となり、同省の担当者は「自治体や愛護団体による譲渡が結果につながった」と分析している。

13年に改正動物愛護法が施行され、自治体が飼い主からの引き取り要請を拒否できるようになったことも大きいという。県南部小動物管

理指導センター(小松市)で殺処分された犬は、改正法施行前の12年度に78匹だった。17年度には6匹まで減少した。

一方で、「石川ドッグレスキュー」が保護した犬は13年度以降3751匹で、依然としてボランティアに頼る状況が続いている。

代表の池田さんは「多くの犬を引き受けたいが、人手や資金には限りがある」と話し、自治体のさらなる協力を求めている。